

県SAY 市SAY

「熱狂なき再選」

愛知県知事選は、現職の大村秀章氏が圧勝した。既成政党を批判した前回と打って変わり、国政与野党の相乗りで共産推薦の新人を破り、余裕で再選を果たした。

時計の針が午後八時を回ると、テレビ各局で再選確定のテロップが流れ、新聞社のニュースサイトは再選確定を報じた。大村氏の事務所では、大村氏がバンザイを繰り返

し、タイを手に喜びの表情をみせ、インタビュールが始まった。

選挙戦は、新人五人が立候補した前回と様変わりし、大村氏と共産推薦の新人との一騎打ちになった。前回、自民党を飛び出した大村氏は、名古屋市の河村たかし市長と組んで立候補し、既成政党を批判して各党の推薦や公認の新人に圧勝した。初当選を決め、名古屋城を背に河村市長と抱き合い、「ウオーツ」と声を上げて何度もバンザイする姿は、大きなインパクトを与えた。二人は「減税だー」「庶民革命」「日本の未来は名古屋・愛知から」とガッツポーズで繰り返し、第三極と呼ばれるような時代の変化と熱狂を感じた。

ところが、河村市長率いる地域政党「減税日本」は拙い

党運営や議員の不祥事、政務調査費の不正流用問題などもあって勢いを失った。自民が二〇一二年十二月に政権に返り咲き、大村氏は除名処分を受けた自民との関係を改善し、今回の知事選では自民県連の推薦を受けた。ほかに、民主と維新、公明、生活、次世代、減税日本から推薦され、「オール与党体制」で臨み、信任投票と呼ばれる選挙となった。再選が決まった時の事務所には、四年前のような熱狂はなく、予定調和の雰囲気があった。

選挙戦で、大村氏と河村氏は並んで街頭に立ち、支援を呼びかける場面があった。河村氏は十数年前、二人で名古屋市港区の藤前干潟の埋め立てに反対した昔話を紹介し、盟友関係の健在ぶりを示した。漫談のように二人の息は

ぴったりで、聴衆を沸かせた。県と市がタッグを組み、観光政策を進める考えも語った。ただ、減税や中京都構想に言及しないまま演説を終えた時には、違和感があった。

知事選の投票率は三四・九％で、前回の五二・五二％から大幅に下がり、一九九五年の三二・三八％に次ぐ戦後二番目の低さだった。

一宮、小牧、安城市長選、豊根村長選が同日選で行われ、投票率上昇の要因もあっただけに、その低さは深刻だ。投票を終えたばかりの初老の男性は「結果は決まってるけれど、投票に来た」と淡々と話した。県政への関心を高めることも、大村氏の二期目の重要なテーマになるだろう。

(た)